

令和7年度委託研究

学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究
経年変化分析調査及び保護者に対する調査の結果等を活用した専門的な分析

最終報告書

2026年6月1日

国立大学法人 福岡教育大学

調査研究の概要

【背景】

2024 年度の全国学力・学習状況調査の経年変化分析調査において、小学校国語・算数、中学国語・英語の各教科において、学力スコアが低下

本報告書では、①学力低下が、どこでどの程度生じているかに関する実態把握、②学力低下の要因に関する多面的な検討、③学力低下に抗している学校の特徴に関する情報収集、④保護者に対する調査のモード効果の検証という4つのテーマを設定する。

I. 「保護者に対する調査の結果」を使った分析（テーマ①・テーマ②）

- ・第1章 保護者調査からみた学力と家庭背景の関心の経年変化
- ・第2章 社会経済的地位による児童生徒・保護者の行動格差
- ・第3章 家族構成と学力・自尊心の関連
- ・第4章 ジェンダーによる算数数学の学力・算数数学に対する意識の格差
- ・第5章 外国ルーツの子どもの学力

II. 「経年変化分析調査」「保護者に対する調査」を使った分析（テーマ①・テーマ②）

- ・第6章 学力低下の再検証

III. オンライン上の調査票による「保護者に対する調査」の精度の検証（テーマ④）

- ・第7章 保護者に対する調査のモード効果の検証

IV. 学校への訪問調査(テーマ③)

- ・第8章 訪問調査の概要と得られた知見
- ・第9章 訪問調査レポート

第1章. 保護者調査からみた学力と家庭背景の経年変化 「保護者に対する調査」の結果を使った分析（テーマ①・テーマ②）

【目的】

学力と家庭背景との関連を検討する。特に、社会経済的地位(SES), 学校外教育支出, 携帯電話・スマートフォン使用時間, および学習時間といった要因と、学力の関連に着目する。

さらに、これらの関係が2021年から2024年にかけてどのように変化したのか検討する。

【分析の概要と変数】

2021年・2024年の全国学力・学習状況調査

小学6年生・中学3年生の国語・算数(数学)

保護者調査から得られる, SES, 学校外教育支出, スマートフォン使用時間, 平日勉強時間, 世帯年収, 保護者学歴など。

※SES: Socio-economic Statusの略。父母の教育年数・世帯年収・父母の勤める企業規模に主成分分析を適用し, 得られた得点を標準化した

分析1

- 世帯年収や保護者学歴といった要素ごとに, 学力との関連を確認

分析2

- 重回帰分析で各要因と学力との関連を検討

分析3

- マルチレベルモデルを用いて学力の分散を個人レベル・学校レベルに分解し, 学校間分散の程度(ICC)を比較

スマートフォン使用時間や平日勉強時間には変化が見られるが、学力との関係にはあまり変化が見られない

携帯電話・スマートフォンの使用

分布の変化が顕著だが、学力との関連は変わらず

「持っていない」が減少（小:38.0⇒28.1, 中13.8⇒6.9）

「3時間以上」の利用は増加（小:6.3⇒10.5, 中:20.2⇒27.0）

2021・2024のいずれも使用時間が長いほど学力は低い

「持っていない」層と「3時間以上」層の学力差は変わらない

平日勉強時間

「2時間以上」が減少といった変化が見られる

「全くしない」層と「2時間以上」層の学力差は変わらない

世帯年収

世帯年収の分布は大きく変わっていない

世帯年収と学力の関係も2021と2024で大きな変化はなし

表. スマートフォン使用時間と算数・数学学力

	小6（2021年度）		小6（2024年度）		中3（2021年度）		中3（2024年度）	
	構成比	算数学力	構成比	算数学力	構成比	数学学力	構成比	数学学力
持っていない	38.0	50.7	28.1	51.8	13.8	51.5	6.9	52.5
持っているが使わない	13.8	52.5	9.1	53.7	3.3	52.0	1.9	53.0
1時間未満	18.8	51.5	19.1	52.5	15.0	53.2	12.3	54.4
1時間以上2時間未満	14.4	49.2	19.5	49.8	25.8	51.5	26.3	52.2
2時間以上3時間未満	8.7	47.7	13.8	47.8	21.8	49.6	25.6	50.4
3時間以上	6.3	46.2	10.5	46.6	20.2	47.3	27.0	48.3

注) 構成比は各カテゴリの割合(%)を示す。算数/数学学力は各年度・学校段階内で平均50, 標準偏差10となるように標準化した偏差値である。

表. 平日勉強時間と算数・数学学力

	小6（2021年度）		小6（2024年度）		中3（2021年度）		中3（2024年度）	
	構成比	算数学力	構成比	算数学力	構成比	数学学力	構成比	数学学力
全くしない	3.4	44.9	4.1	45.1	4.4	42.3	6.6	44.4
30分未満	13.5	47.5	18.4	47.9	8.3	45.9	11.8	47.3
30分以上1時間未満	38.2	49.4	40.9	50.1	19.2	48.6	22.1	49.6
1時間以上2時間未満	31.9	51.1	25.8	51.8	35.9	50.9	33.7	51.8
2時間以上	13.0	55.4	10.8	56.5	32.3	53.4	25.8	54.4

注) 構成比各はカテゴリの割合(%)，算数/数学学力は偏差値。

表. 世帯年収と算数・数学学力

	小6（2021年度）		小6（2024年度）		中3（2021年度）		中3（2024年度）	
	構成比	算数学力	構成比	算数学力	構成比	数学学力	構成比	数学学力
300万円未満	10.4	45.7	11.1	46.2	9.5	46.6	9.8	46.7
300万円以上500万円未満	18.6	48.0	18.1	48.3	16.7	48.2	16.6	48.5
500万円以上700万円未満	25.0	49.8	24.3	50.1	24.2	49.8	23.7	50.2
700万円以上1000万円未満	28.1	51.7	29.5	52.0	30.0	51.6	31.0	52.1
1000万円以上	17.9	54.1	17.1	54.2	19.5	54.4	19.1	54.7

注) 構成比各はカテゴリの割合(%)，算数/数学学力は偏差値。

学力の規定要因・学校間のばらつきに大きな変化は生じていない

表. 学力に対する主要因の影響(回帰分析)

学年	教科	年度	SES	携帯使用	勉強時間	教育費	R ²
小6	国語	2021	5.01***	-1.30***	5.10***	0.97***	0.161
小6	国語	2024	4.55***	-1.86***	4.21***	0.48***	0.124
小6	算数	2021	5.65***	-1.44***	3.59***	1.03***	0.156
小6	算数	2024	5.91***	-2.46***	4.46***	1.12***	0.171
中3	国語	2021	5.29***	-0.90***	3.71***	-0.75***	0.118
中3	国語	2024	5.75**	-1.52***	4.22***	-0.74***	0.126
中3	数学	2021	6.63***	-1.61***	5.12***	-0.18***	0.172
中3	数学	2024	7.67***	-2.21***	5.32***	0.11*	0.186

注) 数値は回帰係数。*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05。地域規模(大都市・中核市・町村)も統制しているが、表には掲載していない。

表. 学校間分散とICC

学年	教科	年度	学校間分散	学校内分散	ICC
小6	国語	2021	38.9	444.6	0.080
小6	国語	2024	28.2	454.3	0.058
小6	算数	2021	30.5	451.0	0.063
小6	算数	2024	36.6	553.3	0.062
中3	国語	2021	25.9	377.7	0.064
中3	国語	2024	32.4	466.1	0.065
中3	数学	2021	45.5	494.2	0.084
中3	数学	2024	60.4	607.4	0.090

回帰分析の結果

SESは、すべての学年・教科・年度において強い正の影響
 平日勉強時間は、一貫して強い正の影響
 スマートフォン使用時間は、すべてのモデルで負の影響
 教育支出は小学校では正だが、中学校では一貫しない
 ※2021と2024で学力の規定要因に変化は見られない

ICCの変化

学力のばらつきを、学校間・学校内に分離して検討する
 学力のばらつきは、主として学校内の個人差として現れている
 学校間分散の割合(ICC)は2021・2024のいずれも大きくはない

第2章. 社会経済的地位による児童生徒・保護者の行動格差 「保護者に対する調査の結果」を使った分析（テーマ①・テーマ②）

【目的】

学力低下と関連していると考えられる児童生徒の学習行動・非学習行動, および学校外の文化的経験について, 社会経済的な格差を検証する

【仮説】

仮説1. コロナ禍期(2021年度)からコロナ禍後(2024年度)にかけて, 児童生徒の学習行動と非学習行動に関するSES格差が拡大した

仮説2. コロナ禍期(2021年度)からコロナ禍後(2024年度)にかけて, 学校外文化的経験のSES格差が拡大した

利用するデータ

経年変化分析調査と悉皆調査

- ・2024年度の個票はPBT対象者のみ

目的変数

- ・学習行動: 平日と週末の学習時間(「4時間以上」は4.5, 「3時間以上4時間未満」は3.5など選択肢の中央値を割り当てて連続変数化。他も同じ)
- ・非学習行動: 平日のテレビゲーム時間, スマートフォン使用時間
- ・学校外の文化的経験: お子さんを図書館に連れて行った, お子さんを博物館や美術館に連れて行った, 等

説明変数

- ・三大都市圏
- ・大都市・中核市・その他の市
- ・へき地
- ・国立・私立
- ・SES など

【小学校】 児童の行動, 学力, 文化的経験, 習い事に関して, SESによる明瞭な差が確認できる。拡大傾向にある項目も存在

明瞭なSES差が確認できる

2021年度: SES上位25%(Q4)は下位25%(Q1)と比べ, 1日あたりの平日学習時間が0.66時間, 週末学習時間が0.89時間長い。テレビゲーム時間は0.87時間, スマートフォン使用時間は0.62時間短い。学力差は1.02で偏差値換算で10.2の差。

2024年度には, Q1のゲーム時間とスマートフォン使用時間が増加し, 非学習行動におけるQ4とQ1の差は拡大

文化的経験と習い事にもSES差がある

文化的経験

2021年度のQ4とQ1の差は, 図書館19.4, 博物館15.2, コンサート8.0, 旅行17.7

2024年度は差が拡大し, 図書館24.9, 博物館28.3, コンサート20.3, 旅行20.4

習い事

高SES層ほど参加率が高く, 2024年度のQ4とQ1の差は, 塾33.5, 英会話14.0, 通信教育13.4, 芸術18.3

SES四分位別の平均値と層間差<小学校6年生>

	平日学習 時間	週末学習 時間	テレビゲー ム時間	スマート フォン使用 時間	学力
2021年度					
SES第1四分位 (Q1)	1.27	1.29	1.89	1.10	-0.48
SES第2四分位 (Q2)	1.42	1.42	1.56	0.80	-0.15
SES第3四分位 (Q3)	1.56	1.61	1.36	0.67	0.12
SES第4四分位 (Q4)	1.93	2.18	1.02	0.48	0.53
Q4とQ1の差	0.66	0.89	-0.87	-0.62	1.02
2024年度					
SES第1四分位 (Q1)	1.14	1.04	2.25	1.59	-0.48
SES第2四分位 (Q2)	1.26	1.15	1.91	1.23	-0.14
SES第3四分位 (Q3)	1.44	1.31	1.62	1.03	0.14
SES第4四分位 (Q4)	1.82	1.86	1.30	0.78	0.51
Q4とQ1の差	0.68	0.82	-0.95	-0.81	0.99

SES四分位別の文化的経験・習い事の割合 (%) とQ4-Q1差 (%) <小学校6年生>

	文化的経験				習い事						
	図書 館	博物 館	コン サート	旅行	塾	英会 話	書道	家庭 教師	通信 教育	スポー ツ	芸術
2021年度											
SES第1四分位 (Q1)	31.8	17.4	4.7	36.7	15.7	7.9	11.1	0.9	7.9	38.9	8.4
SES第2四分位 (Q2)	40.4	19.5	5.4	40.2	24.0	14.0	17.0	0.9	15.7	50.0	16.0
SES第3四分位 (Q3)	44.7	24.2	7.9	46.2	32.7	19.5	18.7	1.0	20.7	52.8	20.2
SES第4四分位 (Q4)	51.3	32.6	12.7	54.3	49.5	23.3	18.5	2.2	24.8	52.1	28.3
Q4とQ1の差	19.4	15.2	8.0	17.7	33.9	15.4	7.4	1.3	16.9	13.2	19.9
2024年度											
SES第1四分位 (Q1)	37.6	33.9	12.3	74.6	14.8	8.3	10.1	0.8	6.7	42.1	8.8
SES第2四分位 (Q2)	48.8	42.4	16.3	84.0	22.8	13.4	14.8	0.7	13.2	50.9	14.5
SES第3四分位 (Q3)	56.7	50.6	22.0	89.8	33.0	17.7	17.3	1.0	17.8	56.0	20.1
SES第4四分位 (Q4)	62.5	62.2	32.6	95.0	48.4	22.4	17.2	2.0	20.1	54.6	27.0
Q4とQ1の差	24.9	28.3	20.3	20.4	33.5	14.0	7.1	1.2	13.4	12.5	18.3

【中学校】生徒の行動, 学力, 文化的経験, 習い事に関して, SESによる明瞭な差が確認できる。拡大傾向にある項目も存在

明瞭なSES差が確認できる

2021年度: SES上位25%(Q4)は下位25%(Q1)と比べ, 1日あたりの平日学習時間が0.49時間, 週末学習時間が0.73時間長い。テレビゲーム時間は0.76時間, スマートフォン使用時間は0.64時間短い。学力差は1.01で偏差値換算で10.1の差。

2024年度には, Q1のゲーム時間とスマートフォン使用時間が増加し, 非学習行動におけるQ4とQ1の差は拡大

文化的経験と習い事にもSES差がある

文化的経験

2021年度のQ4とQ1の差は, 図書館10.5, 博物館8.8, コンサート5.3, 旅行12.9

2024年度は差が拡大し, 図書館12.4, 博物館19.5, コンサート13.1, 旅行23.6

習い事

高SES層ほど参加率が高く, 2024年度のQ4とQ1の差は, 塾33.3, 英会話7.1, 通信教育6.0, 芸術9.5

SES四分位別の平均値と層間差<中学校3年生>

	平日学習 時間	週末学習 時間	テレビゲー ム時間	スマート フォン使用 時間	学力
2021年度					
SES第1四分位 (Q1)	1.55	1.81	1.91	2.07	-0.49
SES第2四分位 (Q2)	1.76	2.07	1.59	1.81	-0.13
SES第3四分位 (Q3)	1.90	2.26	1.40	1.66	0.12
SES第4四分位 (Q4)	2.04	2.55	1.15	1.43	0.52
Q4とQ1の差	0.49	0.73	-0.76	-0.64	1.01
2024年度					
SES第1四分位 (Q1)	1.27	1.35	2.31	2.39	-0.50
SES第2四分位 (Q2)	1.49	1.54	2.01	2.19	-0.15
SES第3四分位 (Q3)	1.63	1.72	1.77	2.04	0.13
SES第4四分位 (Q4)	1.83	2.06	1.47	1.79	0.53
Q4とQ1の差	0.56	0.71	-0.85	-0.61	1.03

SES四分位別の文化的経験・習い事の割合(%)とQ4-Q1差(%)<中学校3年生>

	文化的経験				習い事							
	図書 館	博物 館	コン サート	旅行	塾	英会 話	書道	家庭 教師	通信 教育	ス ポー ツ	芸術	
2021年度												
SES第1四分位 (Q1)	16.6	10.3	3.9	28.7	37.8	4.4	3.9	2.7	6.2	21.6	5.0	
SES第2四分位 (Q2)	20.9	12.6	4.9	29.9	51.2	6.9	5.4	3.0	9.3	22.7	7.8	
SES第3四分位 (Q3)	22.5	13.8	5.7	34.1	61.7	8.6	6.0	2.9	10.4	23.3	9.6	
SES第4四分位 (Q4)	27.1	19.1	9.3	41.7	66.5	11.8	6.8	2.8	13.9	21.5	14.4	
Q4とQ1の差	10.5	8.8	5.3	12.9	28.8	7.3	2.9	0.1	7.7	-0.1	9.5	
2024年度												
SES第1四分位 (Q1)	20.0	20.8	10.3	62.8	32.7	4.2	4.0	1.9	4.9	23.9	4.9	
SES第2四分位 (Q2)	24.8	26.1	12.8	72.5	47.2	6.8	5.5	2.1	7.1	26.4	6.9	
SES第3四分位 (Q3)	27.8	30.3	16.6	79.0	56.6	8.3	6.1	2.3	8.7	25.3	9.5	
SES第4四分位 (Q4)	32.4	40.3	23.4	86.4	66.0	11.3	7.0	2.0	10.9	25.0	14.4	
Q4とQ1の差	12.4	19.5	13.1	23.6	33.3	7.1	3.0	0.1	6.0	1.1	9.5	

第3章. 家族構成と学力・自尊心の関連 「保護者に対する調査の結果」を使った分析 (テーマ①・テーマ②)

【目的】

ひとり親世帯と二人親世帯の経済的状況の差異が、どのような子どもの教育環境や機会の差異を生んでいるのか。

家族構成による自尊心などの非認知能力の格差はどうなっているのか。

【分析データ】

2024年度の「保護者に対する調査」

学力, 自尊心(自分には良いところがあると思う), 学校外教育費, 学校外教育の種類などの関連を検討

※母子世帯, 父子世帯, 二人親世帯の比較

割合は, 二人親世帯 >> 母子世帯 > 父子世帯

世帯年収は, 二人親世帯 > 父子世帯 >> 母子世帯

保護者学歴(大卒)は, 二人親世帯 > 父子世帯 > 母子世帯

表. 家族構成の類型別の割合

	小6		中3	
	度数	割合	度数	割合
母子世帯	2,662	9.7%	6,402	11.3%
父子世帯	722	2.6%	1,660	2.9%
二人親世帯	24,504	87.7%	50,260	85.8%

表. 家族構成×世帯年収

	小6		中3	
	平均	標準誤差	平均	標準誤差
母子世帯	347.93	(6.68)	347.11	(3.92)
父子世帯	717.95	(14.80)	697.15	(11.32)
二人親世帯	792.01	(3.80)	789.82	(2.17)

表. 家族構成×学歴

	小6		中3	
	大卒	非大卒	大卒	非大卒
母子世帯	18.1%	81.9%	13.6%	86.4%
父子世帯	39.2%	60.8%	34.6%	65.4%
二人親世帯	54.0%	46.0%	48.3%	51.7%

家族構成と学力・非認知能力に関連が見られる

家族構成と学力・非認知能力

学力は、いずれの教科でも母子世帯<父子世帯<二人親世帯の順
 ※学力:各教科の正答率を平均50標準偏差10の偏差値に変換

「自分には良いところがあると思う」に「当てはまる」と答えた割合
 小:二人親世帯44%に対し、母子世帯36%
 中:二人親世帯41%に対し、母子世帯37%

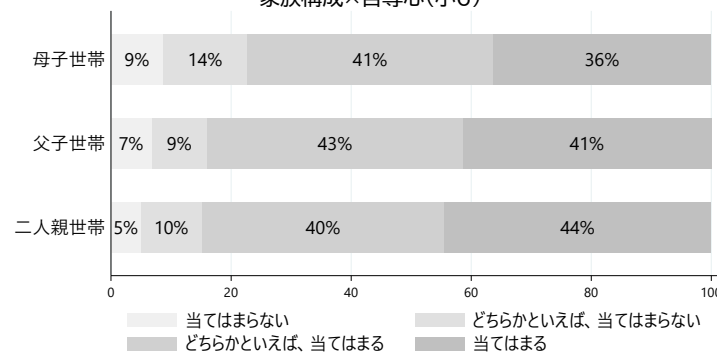
表. 家族構成×学力(算数/数学)

	小 6		中 3	
	平均	標準誤差	平均	標準誤差
母子世帯	46.38	(0.25)	45.97	(0.13)
父子世帯	48.13	(0.38)	47.32	(0.26)
二人親世帯	50.21	(0.04)	50.11	(0.03)

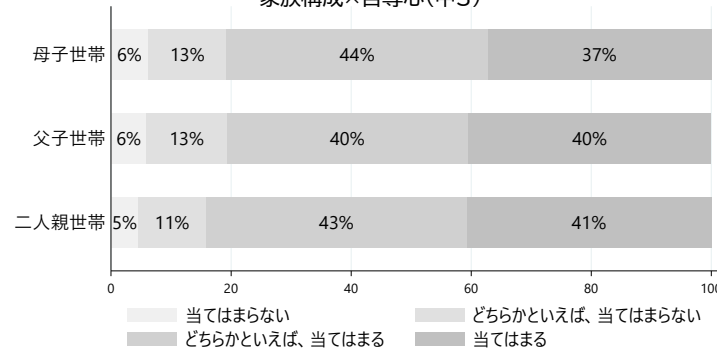
表. 家族構成×学力(国語)

	小 6		中 3	
	平均	標準誤差	平均	標準誤差
母子世帯	46.74	(0.22)	46.72	(0.13)
父子世帯	47.97	(0.52)	47.73	(0.22)
二人親世帯	50.14	(0.03)	50.04	(0.03)

家族構成×自尊心(小6)



家族構成×自尊心(中3)

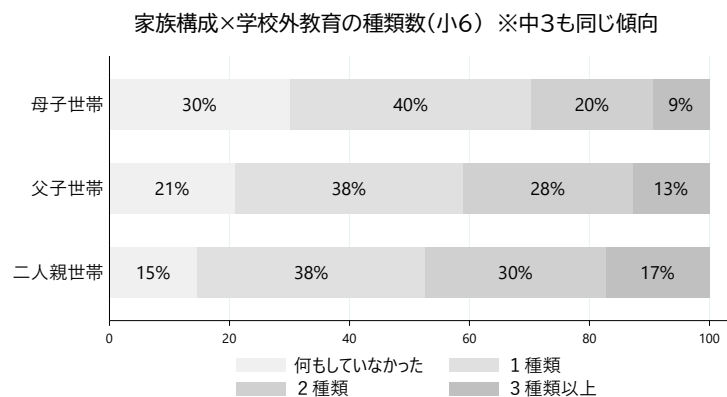


家族構成によって、学校外教育の経験や親の社会関係資本(ネットワーク)に差が見られる

家族構成と体験・親のネットワーク

家族構成によって、学校外教育の種類数に差がある
 ※学校外教育の種類数(小6あるいは中3時の習い事の数の合計)

家族構成によって、親の社会関係資本(ネットワーク)に差がある



家族構成×親の社会関係資本(ネットワーク)

	小6				中3			
	0人	1~10人	11人~20人	21人以上	0人	1~10人	11人~20人	21人以上
名前を知っている子どもの学校の友達								
母子世帯	1%	56%	26%	17%	1%	60%	24%	15%
父子世帯	0%	56%	25%	19%	2%	66%	21%	11%
二人親世帯	0%	48%	29%	23%	1%	53%	27%	19%
子どものことについて相談できる先生や職員								
	0人	1~2人	3~4人	5人以上	0人	1~2人	3~4人	5人以上
母子世帯	16%	70%	11%	3%	19%	67%	11%	2%
父子世帯	16%	67%	13%	4%	19%	68%	11%	2%
二人親世帯	11%	73%	14%	3%	14%	69%	14%	2%
気軽に話のできる学校の保護者								
	0人	1~2人	3~4人	5人以上	0人	1~2人	3~4人	5人以上
母子世帯	17%	66%	12%	5%	20%	63%	12%	5%
父子世帯	19%	61%	14%	6%	23%	60%	12%	5%
二人親世帯	9%	64%	18%	8%	11%	64%	17%	7%
子どものことについて相談できる地域の友人や知人								
	0人	1~2人	3~4人	5人以上	0人	1~2人	3~4人	5人以上
母子世帯	24%	65%	8%	3%	25%	64%	8%	3%
父子世帯	28%	59%	10%	4%	30%	59%	8%	3%
二人親世帯	22%	64%	10%	4%	21%	66%	9%	3%

第4章. ジェンダーによる算数数学の学力・算数数学に対する意識の格差 「保護者に対する調査の結果」を使った分析（テーマ①・テーマ②）

【目的】

小・中学校段階における、算数・数学の学力の分布や特定の領域(例:図形)における男女差について検討する。

女子は比較的早い段階から算数を「苦手」「嫌い」と感じやすいことが指摘されているが、算数・数学に対する意識の男女差は、学校間でどう異なるのか。

【分析データ】

2024年度の「保護者に対する調査」

学力： 正答率を平均50・標準偏差10の偏差値に変換したもの

※算数・数学の平均値に有意な男女差は認められない

※一方で、分布の広がり男子の方が大きい

学力上位層・学力下位層ともに、男子が女子よりも割合が高い

※小6の時点で、算数が好き／嫌いという意識の男女差が現れている

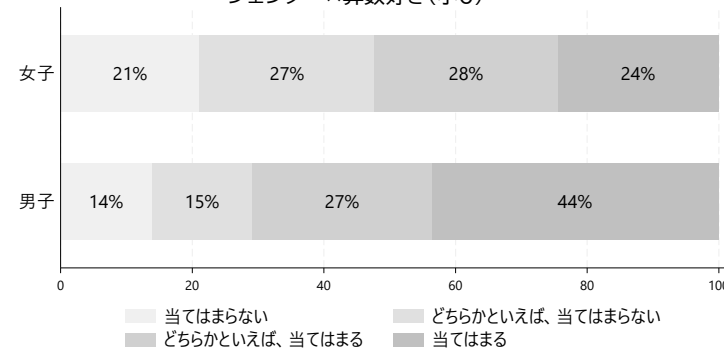
表. ジェンダー×算数・数学学力

	小6		中3	
	平均	標準誤差	平均	標準誤差
女子	49.82	(0.07)	49.49	(0.06)
男子	49.77	(0.08)	49.49	(0.06)

表. ジェンダー×高学力層・低学力層

	小6			中3		
	学力下位	学力中位	学力上位	学力下位	学力中位	学力上位
	10%層	80%層	10%層	10%層	80%層	10%層
女子	13.7%	73.4%	12.9%	13.0%	73.4%	13.6%
男子	15.3%	70.4%	14.3%	14.2%	71.0%	14.9%

ジェンダー×算数好き(小6)



領域によってわずかな男女差が見られる(が, 基本的には限定的)

ジェンダーと算数・数学領域別学力

小6では「変化と関係」において男子>女子。他の領域は, 女子>男子だが差は小さい。

中3では, 「数と式」において女子>男子。「図形」「関数」では, 男子>女子。

小6では「記述式」「選択式」で女子が高く, 「短答式」で男子が高い。
中3では「記述式」は女子が高く, 「選択式」は男子が高い。

※ただし, これらの差は基本的には限定的

表. ジェンダー×算数・数学問題形式別

	小6			中3		
	平均	標準誤差	差	平均	標準誤差	差
選択式						
女子	76.49	(0.27)		57.85	(0.18)	
男子	74.76	(0.20)	-1.73 ***	59.60	(0.19)	1.75 ***
短答式						
女子	60.70	(0.20)		67.42	(0.18)	
男子	63.90	(0.22)	3.20 ***	67.42	(0.16)	-0.01
記述式						
女子	53.37	(0.24)		31.09	(0.21)	
男子	49.42	(0.30)	-3.95 ***	29.31	(0.24)	-1.78 ***

表. ジェンダー×算数・数学領域別

	小6			中3		
	平均	標準誤差	差	平均	標準誤差	差
数と計算 (中3は数と式)						
女子	67.01	(0.23)		52.83	(0.24)	
男子	65.66	(0.22)	-1.35 **	50.83	(0.23)	-2.00 ***
図形						
女子	67.72	(0.29)		40.01	(0.23)	
男子	65.47	(0.20)	-2.25 ***	41.59	(0.24)	1.59 ***
変化と関係 (中3は関数)						
女子	48.24	(0.27)		60.64	(0.15)	
男子	55.82	(0.33)	7.58 ***	61.35	(0.15)	0.72 **
データの活用						
女子	63.13	(0.21)		55.63	(0.24)	
男子	61.28	(0.29)	-1.85 ***	56.18	(0.26)	0.55

同程度の学力でも女子は算数好きになりにくい。ただし授業によっては男女差が改善する可能性も

ジェンダーと算数・数学に対する意識

小6の時点で、同程度の学力であっても男子の方が算数好きになる傾向が見られる

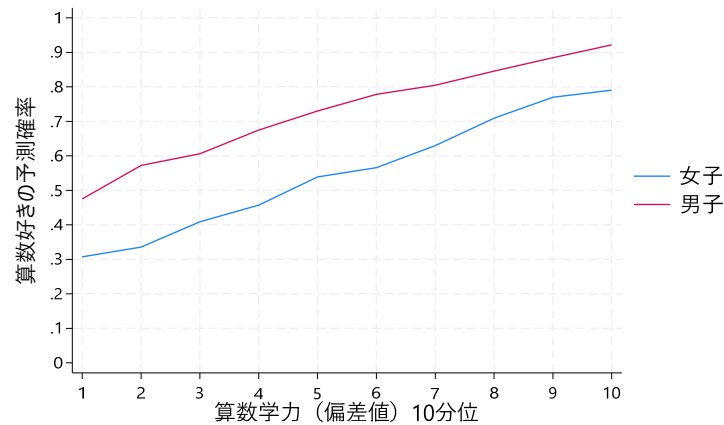
「算数が好き」になる確率が約80%になる学力水準が、男子は第7分位（上位3割程度）に対し、女子は第10分位（最上位層）。逆に言えば、男子は学力が低い場合でも算数を嫌いになる傾向が弱い

「実生活と結びつけた授業」を行った学校ほど、女子児童の算数を「好き」と感じる割合が高い（男子にはこの関連は見られない）。

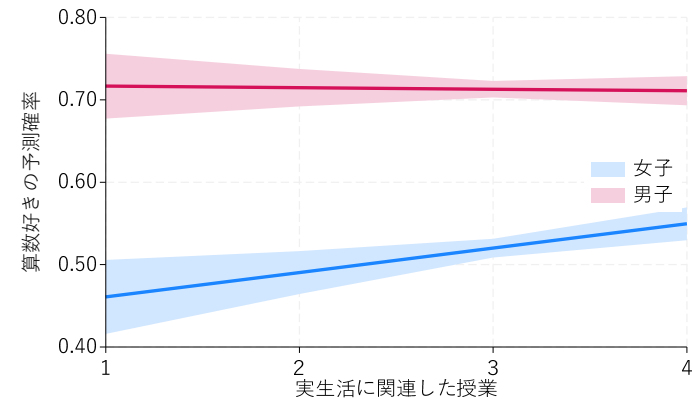
「生活の事象との関連を図った授業を行った学校ほど、学校内の算数好きの男女差が小さい傾向がある。

※上記の傾向は小6のみ。中3では見られない。

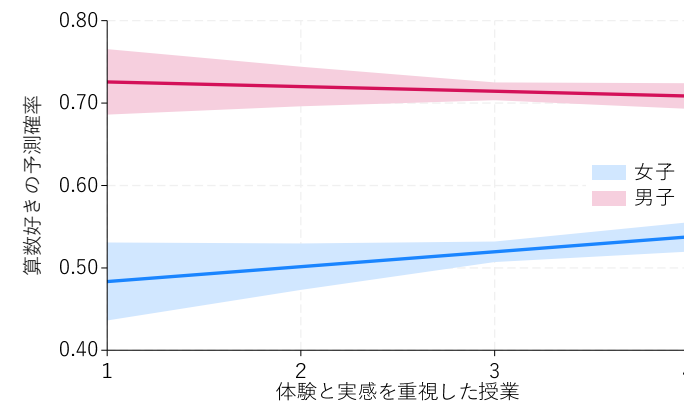
学力別にみた算数好きの男女差



実生活に関連した授業×算数好きの男女差(小6)



体験と実感を重視した授業×算数好きの男女差(小6)



第5章. 外国ルーツの子どもの学力 「保護者に対する調査の結果」を使った分析（テーマ①・テーマ②）

【目的】

外国ルーツの子ども個人の努力によって、学力は獲得できるのか

具体的には、外国ルーツの子どもの学力における不利の克服には、どの程度の学習時間が必要となるのか検討を行う

【分析データ】

2021年度・2024年度の「保護者に対する調査」

【使用する変数】

外国ルーツの子ども： 両親のうちいずれか一方が外国出生の子ども

学習時間： 平日における学校の授業以外での1日あたりの学習時間

学力： 小6の国語と算数, 中3の国語と数学

本体調査の正答率を偏差値にしたもの

※外国ルーツの子どもの方が2021年度・2024年度ともに学力が低い傾向が見られる

表. 学力の比較

	小学校			中学校			
	両親日・日	外国ルーツ		両親日・日	外国ルーツ		
		外・日	外・外		外・日	外・外	
令和3年度	国語	50.29 (0.05)	47.95 (0.50)	44.04 (0.91)	50.32 (0.03)	47.16 (0.33)	42.60 (0.89)
	算数・数学	50.26 (0.03)	47.81 (0.62)	45.23 (0.80)	50.30 (0.04)	47.31 (0.27)	45.91 (0.76)
令和6年度 (PBT)	国語	50.44 (0.03)	48.58 (0.45)	45.24 (0.73)	50.48 (0.02)	48.95 (0.37)	43.55 (0.84)
	算数・数学	50.41 (0.03)	49.16 (0.40)	47.92 (0.81)	50.52 (0.03)	48.93 (0.38)	44.45 (0.76)
令和6年度 (CBT)	国語	50.39 (0.04)	48.52 (0.43)	46.09 (1.27)	50.42 (0.03)	49.13 (0.44)	43.44 (0.83)
	算数・数学	50.42 (0.03)	48.75 (0.40)	47.89 (1.20)	50.48 (0.03)	49.37 (0.47)	45.94 (0.91)

注) ()内は標準誤差を示している。

学習時間「3時間以上」の割合は外国ルーツの子どもの方が高いが、偏差値50に達するために必要な勉強時間は外国ルーツの子どもの方が長い

学習時間の比較

学習時間が「3時間以上」のグループの割合は、外国ルーツの子どもの中で高い傾向が見られる。

いずれの教科でも、外国ルーツの子どもが偏差値50(図中の破線)に達するための勉強時間は日本の子どもより長い傾向がある。

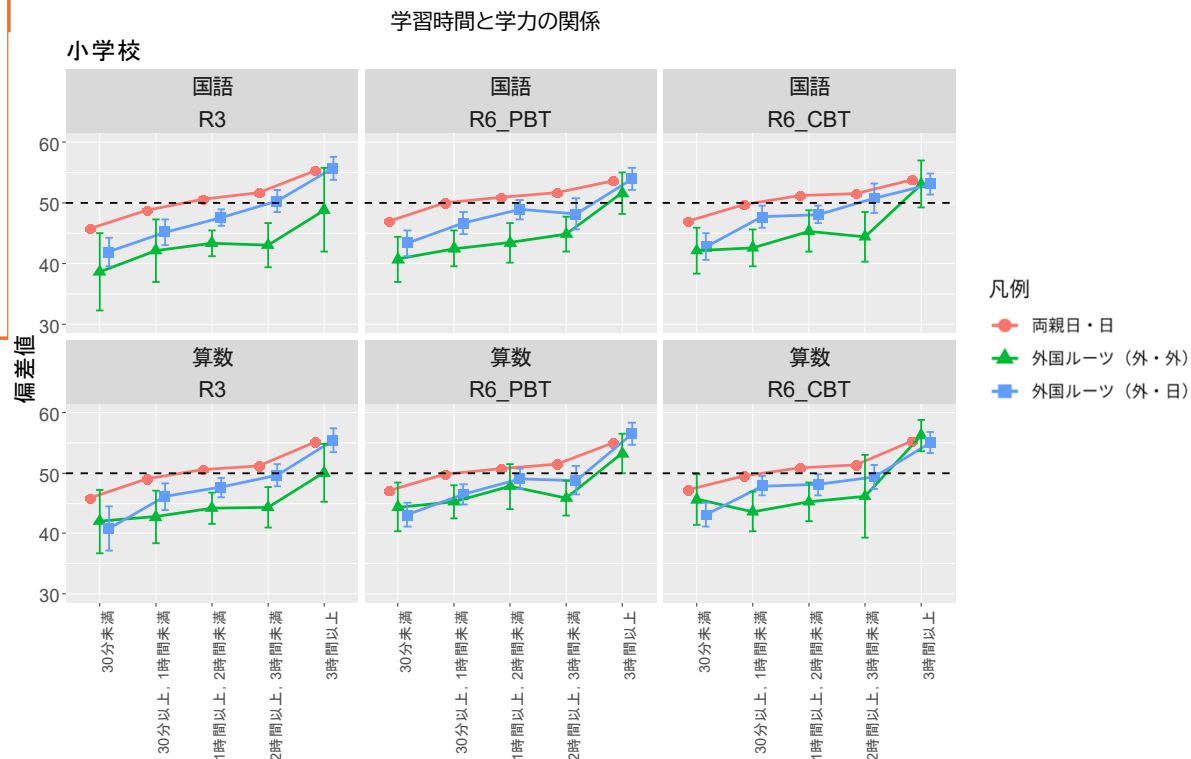
偏差値50に達するための勉強時間

両親日・日の児童の場合は、「2時間以上、3時間未満」

外国ルーツの子どもの場合は、「3時間以上」

表. 学習時間の構成割合

		小学校			中学校		
		両親日・日	外国ルーツ		両親日・日	外国ルーツ	
			外・日	外・外		外・日	外・外
令和3年度	3時間以上	12.09	15.29	24.70	12.57	14.13	19.53
	2時間以上, 3時間未満	15.44	16.45	18.12	29.65	27.87	28.63
	1時間以上, 2時間未満	36.06	33.48	32.90	34.33	32.24	26.59
	30分以上, 1時間未満	24.47	19.90	15.98	14.01	11.87	14.91
	30分未満	11.93	14.88	8.30	9.44	13.89	10.34
	計	100	100	100	100	100	100
令和6年度 (PBT)	3時間以上	11.18	21.34	25.11	9.67	12.27	15.64
	2時間以上, 3時間未満	12.57	14.61	18.81	23.17	21.02	22.92
	1時間以上, 2時間未満	31.89	27.01	25.79	32.97	32.45	32.11
	30分以上, 1時間未満	27.29	22.75	19.07	18.46	17.32	14.23
	30分未満	17.07	14.29	11.23	15.73	16.93	15.10
	計	100	100	100	100	100	100
令和6年度 (CBT)	3時間以上	11.48	19.03	25.87	9.39	11.66	11.49
	2時間以上, 3時間未満	12.98	15.44	15.57	22.74	22.53	25.99
	1時間以上, 2時間未満	31.15	28.17	21.22	32.92	31.11	33.98
	30分以上, 1時間未満	27.42	21.45	22.78	18.90	19.20	13.36
	30分未満	16.97	15.90	14.55	16.05	15.50	15.18
	計	100	100	100	100	100	100



性別・SES・学習時間を考慮した上での学力の比較

回帰分析

性別・SES・学習時間を揃えても、外国ルーツの子どもの方が学力が低い。国語と算数(数学)を比べると、国語の方が低い傾向が見られる。R3とR6では、R6の方が差が小さい。

両親日・日の子どもは、学習時間が長い方が学力が高く、短い方が低いという傾向が明瞭。

外国ルーツの子どもは、明瞭な差が見られるのは「3時間以上」「30分未満」など一部に限られる。ただし比較の基準となる「1時間以上、2時間未満」との学力差は、両親日・日の子どもより大きい傾向がある。

表. 回帰分析(SES等を揃えた上での比較)

小学校		国語			算数		
		R3	R6_PBT	R6_CBT	R3	R6_PBT	R6_CBT
外国ルーツ (外国出生)	Coef.	-6.25***	-5.30***	-4.10***	-4.86***	-2.46**	-2.41*
	S.E.	0.95	0.70	1.10	0.75	0.78	1.00
外国ルーツ (日本出生)	Coef.	-1.73***	-1.58***	-1.68***	-1.81***	-0.89*	-1.51***
	S.E.	0.41	0.42	0.38	0.51	0.34	0.35
中学校		国語			数学		
		R3	R6_PBT	R6_CBT	R3	R6_PBT	R6_CBT
外国ルーツ (外国出生)	Coef.	-6.67***	-5.65***	-5.95***	-3.21***	-4.71***	-3.44***
	S.E.	0.89	0.72	0.75	0.75	0.67	0.80
外国ルーツ (日本出生)	Coef.	-2.24***	-0.73*	-0.69	-1.95***	-0.73*	-0.39
	S.E.	0.33	0.36	0.37	0.28	0.32	0.41

回帰分析(学習時間の効果の比較)

両親日・日		国語				算数			
		R3	R6	PBT	R6_CBT	R3	R6	PBT	R6_CBT
学習時間の基準									
1時間以上, 2時間未満									
3時間以上	Coef.	2.83***	1.14***	1.14***	2.53***	2.34***	2.51***		
	S.E.	0.18	0.25	0.23	0.17	0.19	0.25		
2時間以上, 3時間未満	Coef.	0.44*	0.07	-0.29	0.12	0.25	-0.10		
	S.E.	0.17	0.19	0.19	0.19	0.18	0.21		
30分以上, 1時間未満	Coef.	-1.45***	-0.63**	-1.19***	-1.18***	-0.63***	-1.10***		
	S.E.	0.16	0.18	0.16	0.17	0.16	0.17		
30分未満	Coef.	-3.87***	-3.12***	-3.46***	-3.78***	-2.90***	-2.90***		
	S.E.	0.23	0.21	0.18	0.22	0.19	0.19		
外国ルーツ (外・外)		国語				算数			
		R3	R6	PBT	R6_CBT	R3	R6	PBT	R6_CBT
3時間以上	Coef.	3.52	6.19*	6.12*	4.08	3.21	9.21***		
	S.E.	3.42	2.45	2.62	2.29	2.60	2.38		
2時間以上, 3時間未満	Coef.	0.17	0.91	-1.34	0.29	-2.21	0.63		
	S.E.	2.15	2.26	2.29	2.08	2.22	3.02		
30分以上, 1時間未満	Coef.	-1.23	-1.26	-1.96	-1.65	-2.68	-0.77		
	S.E.	2.61	2.43	1.83	2.41	2.28	1.83		
30分未満	Coef.	-7.08	-2.18	-1.75	-4.65	-2.51	1.50		
	S.E.	4.29	2.36	2.31	3.87	2.56	2.84		
外国ルーツ (外・日)		国語				算数			
		R3	R6	PBT	R6_CBT	R3	R6	PBT	R6_CBT
3時間以上	Coef.	6.24***	3.64**	3.45***	5.06***	5.69***	5.04***		
	S.E.	1.36	1.22	0.96	1.43	1.38	1.10		
2時間以上, 3時間未満	Coef.	2.31*	-0.97	1.93	1.43	-0.53	0.59		
	S.E.	1.15	1.60	1.65	1.19	1.53	1.40		
30分以上, 1時間未満	Coef.	-2.37*	-2.12	-0.11	-1.33	-2.53*	0.42		
	S.E.	1.08	1.17	0.91	1.21	1.05	1.03		
30分未満	Coef.	-4.46**	-4.58***	-4.19**	-5.47**	-4.78***	-3.44*		
	S.E.	1.59	1.25	1.46	2.04	1.34	1.67		

第6章. 学力低下の再検証

「経年変化分析調査」「保護者に対する調査」を使った分析（テーマ①・テーマ②）

【目的】

「2021年度から2024年度にかけての学力低下・学力格差の拡大」という分析を再検証する

【要点】

- 1) 母集団の能力分布を適切に推定できる, 推算値 (Plausible Values: PVs) の使用
- 2) 「本の冊数」ではなく, 保護者調査から得られる SES 指標を利用
- 3) 学力低下の要因として, 各自治体の休校期間の長さ・児童生徒の習い事に着目する

【分析データ】

2021年度・2024年度の経年変化分析調査・保護者に対する調査の両方が揃う回答に限定。2024年度調査はPBTのみ

保護者調査票の未回収はウェイトで補正。標準誤差の算出にはJK法を利用

共通尺度化

- 2PLによる多母集団同時分析
- 2021年度の児童生徒の学力を, 平均500・標準偏差100に変換 (公式の値と異なることに留意)

推算値

- SES, 休校期間, 習い事といった分析に利用する変数で条件付け (Conditioning)
- 5つのPVを生成し, Rubinルールで推定

休校期間と習い事

- 休校期間と習い事の有無 (2時点以上で習い事を「何もしていないかった」と回答したグループを1, それ以外を0としたダミー変数) の交互作用を含めた回帰分析を行い, 交互作用をグラフ化

学力低下は間違いないが、低下幅と格差拡大は限定的

PVsによる低下幅

中学校：国語7.4, 数学6.0, 英語18.7
 小学校：国語9.4, 算数13.7

※経年変化分析調査で採用されているMLEより低下幅は小さい

測定誤差 + 標本誤差を考慮した判断

中学校数学は、学力低下とは判断しづらい
 中学校英語・小学校算数は明瞭に学力低下

学力とSESの関連

明らかに格差が拡大しているとは言いがたい
 SESと学力の相関係数は2021・2024年度で大きく
 変わらない

中学校の場合、国語0.33⇒0.33, 数学0.37⇒0.39, 英語0.42⇒0.40
 小学校の場合、国語0.38⇒0.37, 算数0.40⇒0.40 (※PV1のみ利用した値)

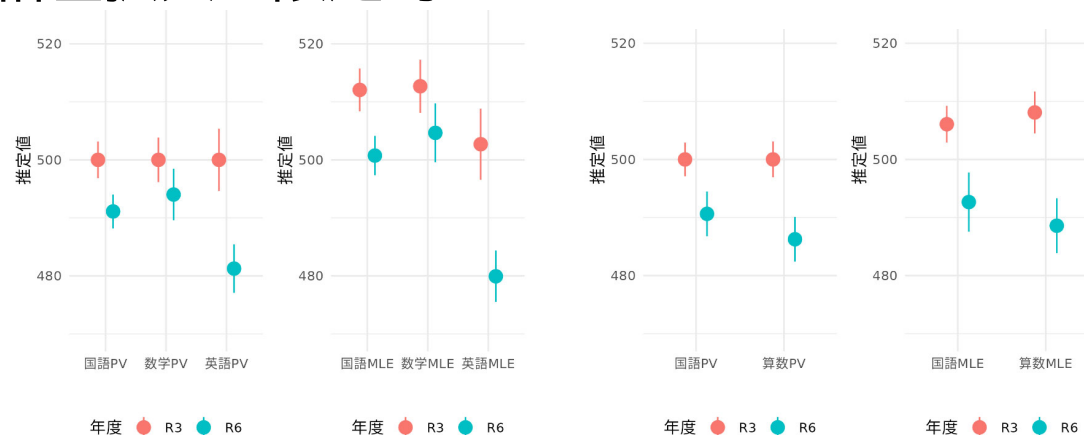


図. PVsとMLEの比較(中学校)

SESと学力差(中学校) 左から国語・数学・英語の順

	2021		2024			2021		2024			2021		2024		
	平均値	S.E.	平均値	S.E.	差	平均値	S.E.	平均値	S.E.	差	平均値	S.E.	平均値	S.E.	差
SES 低	459.9	1.6	452.3	1.7	7.5	454.5	1.8	444.1	1.9	10.4	448.4	2.3	431.8	2.1	16.5
SES 中・低	486.7	1.6	479.6	2.1	7.1	485.1	2.0	478.5	2.5	6.5	481.6	2.0	467.6	1.9	14.0
SES 中・高	508.8	1.7	502.3	1.9	6.5	510.6	2.3	506.4	1.9	4.2	510.3	2.2	494.3	2.1	15.9
SES 高	543.5	2.2	540.7	2.6	2.8	551.5	2.3	543.8	2.2	7.8	556.1	3.8	532.3	2.2	23.7

SESと学力差(小学校) 左から国語・算数の順

	2021		2024			2021		2024		
	平均値	S.E.	平均値	S.E.	差	平均値	S.E.	平均値	S.E.	差
SES 低	454.3	2.3	442.5	2.6	11.9	451.2	2.5	437.8	2.3	13.4
SES 中・低	483.0	1.9	475.7	2.2	7.3	485.6	2.2	471.5	2.1	14.2
SES 中・高	510.3	1.9	499.9	2.1	10.4	509.6	2.1	495.9	1.5	13.7
SES 高	551.6	1.8	542.5	2.1	9.1	554.2	2.3	540.3	2.3	13.9

※2024年度の中3は2021年度に小6だったことも踏まえ、2021年度学校質問調査(小学校)の休校期間の変数を市町村単位で平均し、休校期間を示す変数とした。

児童生徒のSESを統制した上で、休校日数と習い事の有無の交互作用を描画

休校日数と学力に関連は見られたが、因果関係は不明

教科と学力

国語・算数(数学)については、休校期間が長いほど、習い事なし層の学力が低い。2024年度の方が深刻な教科もある(小・算) 英語については、休校が長いほど、習い事あり層の学力が高い。2021年度の方が傾向が明瞭で、2024年度は習い事をしていない層としていない層の差が縮小 一般に休校措置を実施している学校は都市部の方が多く、SESは統制しているものの詳細な理由は不明 休校中の代替手段が、英語では有効に働いた可能性も考えられる。他にも、学校再開後の授業における会話等の制約が学力に影響した可能性もあり、さらなる分析が必要

※川口・垂見(2025)ではSESを統制すれば地域規模と学力に関連は見られない。一方、文部科学省の令和6年度「英語教育実施状況調査」では英語力に地域差があることが指摘されている。

川口・垂見, 2025, 「全国学力・学習状況調査による教科間学力格差の検討」『理論と方法』40(1), 13-24

今後の課題

公的に生成されたPVsがデータセットに含まれる必要がある
クロスセクションデータの限界を補うパネルデータの整備

2021年と2024年で習い事を「していない」割合に大きな変化は見られない
そのため、今回の変化を、単純に学校外教育と結びつけることは難しい

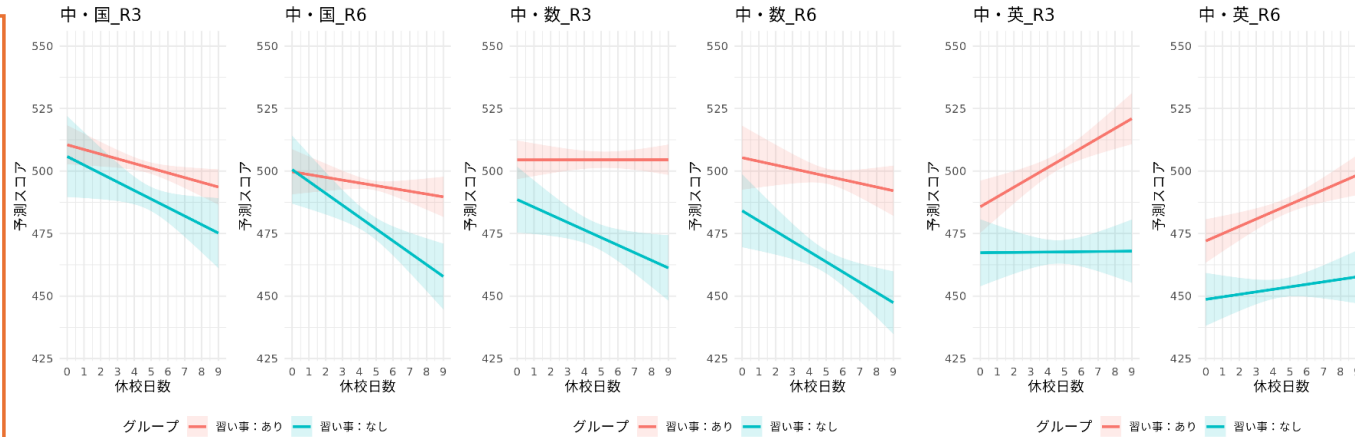


図. 休校・学力・習い事の関係(中学校)

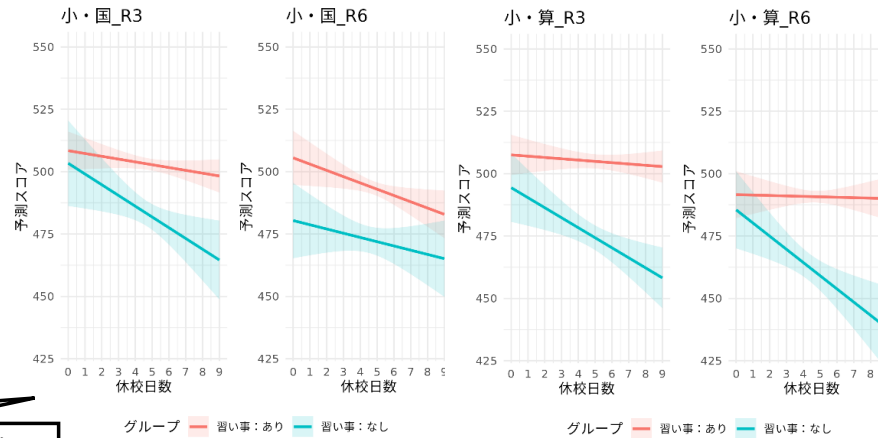


図. 休校・学力・習い事の関係(小学校)

【留意点】
今回の分析は、あくまで一時点のクロスセクションデータを利用して、2021年度・2024年度の学力実態を比較したのみ。**休校期間そのものが学力に影響を与えたと言うことはできない**

第7章. 保護者に対する調査のモード効果の検証 オンライン上の調査票による「保護者に対する調査」の精度の検証 (テーマ④)

表. 保護者調査の標本サイズと回収数

	小学校			中学校		
	PBT	CBT	合計	PBT	CBT	合計
標本	32,889	32,651	65,540	74,081	75,155	149,236
回収	28,850	28,273	57,123	60,266	56,968	117,234
回収率	87.7%	86.6%	87.2%	81.4%	75.8%	78.6%

【目的】

保護者に対する調査は、紙の調査票によるモードとオンライン上の調査票によるモードの2種類の調査で実施された。両調査モードの間で回答傾向を比較し、今後調査モードをCBTへ一本化する上で注意すべき点を明らかにする。

※それぞれの調査は、Paper Based Testing: PBT, Computer Based Testing :CBTという用語を借りて、PBT・CBTと表記する

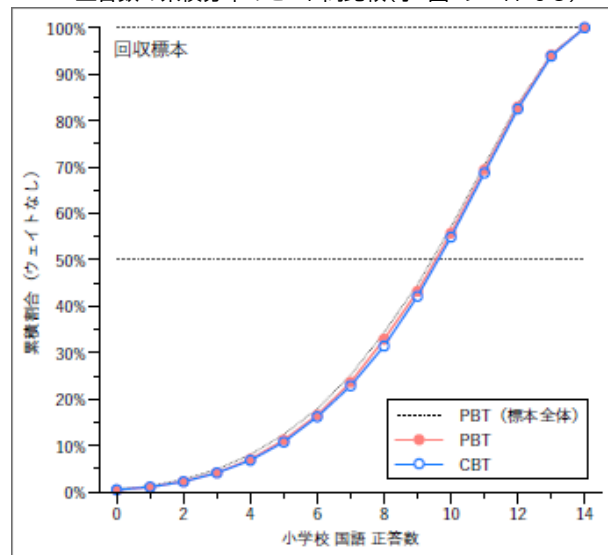
【回収数】

小学校・中学校ともに、CBTの方が回収率はやや低い。小学校に比べて中学校の方が回収率が低い。

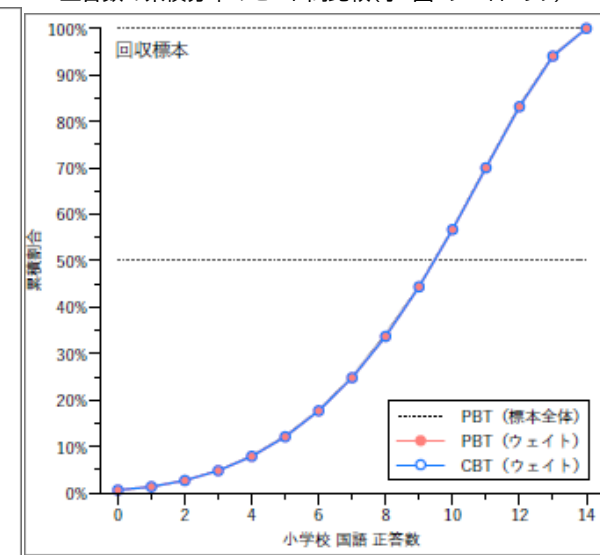
正答数の累積分布のモード間比較では、PBTよりもCBTの方がわずかに正答数は大きい。また、PBTの標本全体と比べて、回収標本はPBT、CBTともに正答数は大きくなっている。つまり、保護者調査では学力が低い児童・生徒の保護者は未回収となりやすく、さらに、PBTと比べてCBTの方が、低学力の児童・生徒の保護者が未回収となりやすい

回収標本において、ウェイトを用いた時の累積分布をモード間比較すると、抽出された標本全体と回収標本の累積分布はほぼ一致し、PBTとCBTの間にも違いはほとんど認められない。つまり、ウェイトを用いることで、学力に関しては未回収によるバイアスやモード間の差は解消される

正答数の累積分布のモード間比較(小・国・ウェイトなし)



正答数の累積分布のモード間比較(小・国・ウェイトあり)



調査モード間で「無回答」に差が見られる

無回答の比較

一般にCBTよりもPBTの方が無回答の割合は大きい。とくに、以下の項目でPBTの方が無回答の割合が大きい。

4(5)お子さんは、地方公共団体やNPO法人等が無償で行っている学習支援で勉強をしていますか。

4(6)お子さんが、①(小学校入学以前)から③(現在)の時点でオンラインによるものも含んで定期的に参加していた習い事について、当てはまる番号すべてに○をつけてください。

⇒ 調査票のレイアウトが影響した可能性がある

相対的に小さく示されており、見落とされやすかった可能性

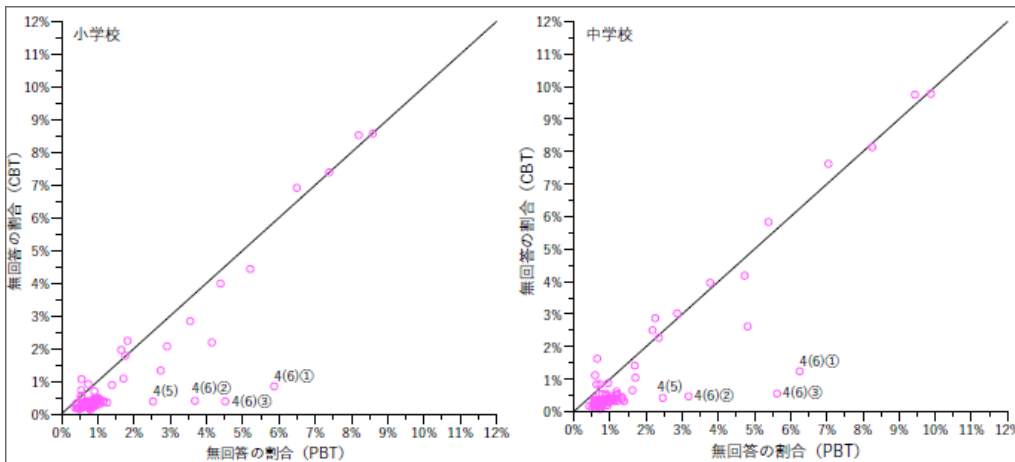
(5)お子さんは、地方公共団体やNPO法人等が無償で行っている学習支援で勉強をしていますか。

1. はい 2. いいえ

(6)お子さんが、①(小学校入学以前)から③(現在)の時点でオンラインによるものも含んで定期的に参加していた習い事について、当てはまる番号すべてに○をつけてください。

	何もしなかった	学習塾(通塾や補習のための塾)	英会話・英語教室	書道・習字・そろばん	家庭教師	通信教育・通信添削	スポーツ(水泳、サッカー、ダンス、空手、体操教室など)	芸術(音楽、楽器、絵画、工作、バレエ、華道、茶道など)
①: 小学校入学以前	⇒ 1	2	3	4	5	6	7	8
②: 小学校1年生から3年生	⇒ 1	2	3	4	5	6	7	8
③: 小学校6年生(現在)	⇒ 1	2	3	4	5	6	7	8

無回答の割合のモード間比較



「小学校入学以前」は参加がなければ「何もしなかった」を選ぶべきところ、学習塾について「小学校6年生」を選び、英会話については「小学1年生から3年生」と「小学6年生」を選ぶなどすることで、結果として「小学校入学以前」の行が無回答になったといったことが考えられる。

調査モード間で「無回答」に差が見られる

年収の比較

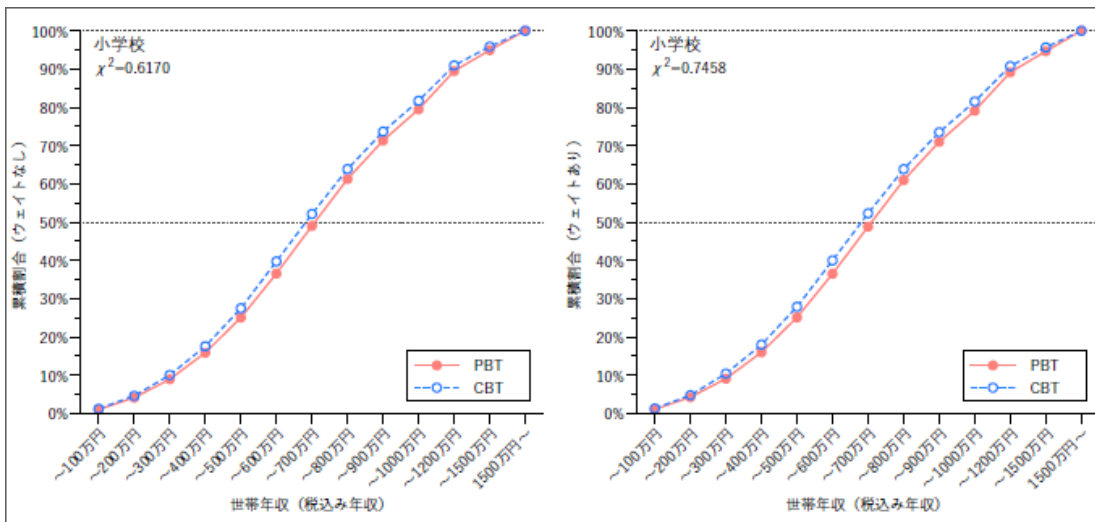
PBTとCBTで年収の割合の累積分布を比較

χ^2 値はPBTとCBTの間の割合の差の指標

CBTよりPBTの方が収入が若干高い。両者の差はウェイトを用いても縮小せず、むしろ拡大する

PBTでは選択肢が二列で示されていることが影響したという仮説が考えられる。

世帯年収のモード間比較(小学校) 左ウェイトなし・右ウェイトあり



(9) あなたのご家族全体の世帯収入(税込み年収)は次のどれにあてはまりますか。

- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1. 100万円未満 | 8. 700万円以上800万円未満 |
| 2. 100万円以上200万円未満 | 9. 800万円以上900万円未満 |
| 3. 200万円以上300万円未満 | 10. 900万円以上1,000万円未満 |
| 4. 300万円以上400万円未満 | 11. 1,000万円以上1,200万円未満 |
| 5. 400万円以上500万円未満 | 12. 1,200万円以上1,500万円未満 |
| 6. 500万円以上600万円未満 | 13. 1,500万円以上 |
| 7. 600万円以上700万円未満 | |

視線が横方向に移動することで、「8. 700万以上800万円未満」を2番目に見ることになる。初頭効果によって、高い年収の選択肢の割合がPBTでは大きくなったという仮説が考えられる。

【まとめ】

従来PBTで実施していた保護者調査をCBTで実施するに当たって、大きな問題は見いだせない。むしろ、PBTでは紙面のレイアウトが回答に影響を与えている可能性があり、CBTへ変更することでそのような影響を排除できると期待できる

第8章. 訪問調査の概要と得られた知見 学校への訪問調査(テーマ④)

【目的】

学力を維持(あるいは向上)させている「成果をあげている学校」への訪問調査を行い、学力の維持・向上に有益な取り組みの在り方に関する情報を収集すること。

学力が伸び悩んでいる学校「成果をあげることができなかった学校」に対しても聞き取り調査を行い、学力の伸び悩みの要因について、幅広く情報を収集すること。

【方法】

1) 2021年度から2024年度までの全国学力・学習状況調査(悉皆調査)の国語と算数(数学)の学校ごとの平均偏差値を計算する

2) 学校ごとに回帰分析を行い、学校ごとに回帰係数を算出する

3) 回帰係数が全国の平均より1標準偏差以上の学校 ≡ 「成果をあげている学校」 1標準偏差以上-の学校 ≡ 「成果をあげることができなかった学校」とする

4) 市町村教育委員会ごとに、「成果をあげている学校」「成果をあげることができなかった学校」の割合を計算し、「成果をあげている学校」の割合が小学校・中学校ともに高い教育委員会を、調査対象に選定する。

【知見】

1) 成果をあげる道筋は一つではない

あえて「成果をあげている学校」と「成果をあげることができなかった学校」の違いを挙げるとすれば、狭義の学力も重点課題の一つとして視野に入れつつ、学びに向かう子ども集団を作ることができたかどうか

2) 学校現場は学力向上を最優先にしているわけではない

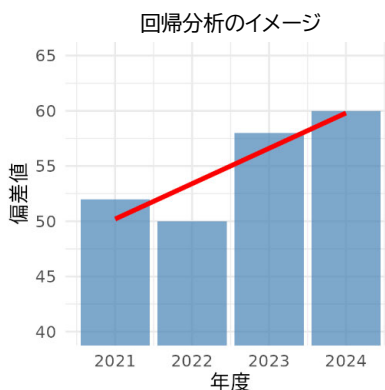
いずれの学校・教育委員会も、テストの点数(≡狭義の学力)の重要性を否定こそしないものの、テストで測定することが難しい学力(≡広義の学力)を育成することを強調。たとえ学力が向上している「成果をあげている学校」の教員であっても、自校の課題として地域社会で自立して生きる「たくましさ」を身につけさせなければならないと語るなど、狭義の学力にとどまらない広い学力観を有している。

※学力調査の結果だけで、教育の成果を測定する危険性

3) 「成果をあげている学校」を特定する手法について

一時点の学力調査をもとに学校を評価することへの批判

将来の子どもたちの育ちも含めて評価するべきではないか



教育委員会を対象とした理由

理由1・・・「成果をあげている学校」を支える教育委員会の施策に着目したい

理由2・・・たまたま「成果をあげている学校」と判定された可能性があるため、事前に教育委員会から情報収集を行い、特に特徴的な取り組みをしている学校に調査対象を絞る

対案

「学力の伸び」を測る
卒業後の進路や就職に対する学校の影響を評価する など

※狭義の学力で学校を評価することの危険性についても併せて議論していく必要がある。

第9章. 訪問調査レポート 学校への訪問調査(テーマ④)

学力向上を生む,「多層の支え」

学校の成果は, 単一の施策・実践ではなく, 複数の実践が組み合わさって生じている

成果への道筋は一つではない

授業改善

基礎・基本の定着
見通し／振り返り
選択学習
自律的・協働的に学ぶ など

学校組織

リーダーシップの発揮
同僚性
若手教員への支援
定期的な体制の見直し など

小中一貫 コミュニティスクール

中学校区で目標と課題の共有
学びの連続性
地域行事

学びを支える生活・安心 の土台づくり

人権教育
不登校対応
居場所づくり
スクールカウンセラー, SSWなど

地域・家庭の存在

家庭学習 放課後学習 サポート隊
地域行事 居場所づくり

※学校の学力は, 家庭状況や地域資源の影響を受ける

教育委員会の支え

学力調査の分析とフィードバック
伴走支援 ICT・人員・予算・研修といった学習環境の整備

※学校が自走できるよう支える

うめ市: 独自調査と伴走 くるみ市: 学び合い すみれ市: 実態をもとに施策を展開 つつじ市: 「できるまでやる」という姿勢
ふよう市: 子ども主体の学び むくげ市: 丁寧な教育 よつば市: 「みんな」で支えるという理念

まとめ

I. 「保護者に対する調査の結果」を使った分析（テーマ①・テーマ②）

SES等の要因で、児童生徒の学力や行動には差が生じる(第1章, 第2章, 第3章, 第4章, 第5章)
文化的経験など、一部の差は2021年度から2024年度にかけて差が拡大する傾向も見られる(第2章)
学力とSES等の要因の間に関連は見られるものの、その関連が強まっている傾向は見いだせない(第1章, 第2章, 第5章, 第6章)
※生活や行動の格差は拡大しつつあるが、学力格差の拡大にまでは繋がっていない。

II. 「経年変化分析調査」「保護者に対する調査」を使った分析（テーマ①・テーマ②）

小学校算数・中学校英語では学力低下の傾向が見られる(第6章)
学力低下と関係する要因の一つとして、休校期間や習い事の有無が挙げられる。ただし因果関係は断定できない(第6章)

III. オンライン上の調査票による「保護者に対する調査」の精度の検証（テーマ④）

従来PBTで実施していた保護者調査をCBTで実施するに当たって、大きな問題は見いだせない(第7章)
PBTでは紙面のレイアウトが回答に影響を与えている可能性があり、CBTへ変更することでそのような影響を排除できる(第7章)

IV. 学校への訪問調査(テーマ③)

「成果をあげている学校」と「成果をあげることができなかった学校」の違いは何か？
あえて言えば、狭義の学力も重点課題の一つとして視野に入れつつ、学びに向かう子どもの集団を作ることができたか(第8章・第9章)

今後のさらなる分析のため、全国学力・学習状況調査において改善が求められる課題

データセットに公的なPVs(推算値)が含まれていないという問題 ⇒ MLEに加え、PVsの追加を議論する必要

利用できるデータが小6・中3の1時点のみで因果関係を推論することが難しい ⇒ パネルデータへの拡張を議論する必要